

山崎さんの思い出

創価大学文学部教授 森 幸雄

「山崎先生」とお呼びすると別の人のようなので、ふだんのように「山崎さん」と呼ばせていただきたい。

文学部長をされていた時のことだ。学部長補佐をしていた私を学生や保護者に次のように紹介してくださった。「1968年、創価学園が小平の地に開校した際に、森さんも入学してきた。古くからの付き合いです」。山崎さんが高校一期生として、創価学園に入学したとき、私も中学に1年生として入学したが、自宅から通学していた中学生の私と、寮生活の高校生の山崎さんとの接点はなく、当方はお名前を知っているという程度であった。大学の教員になって、学園時代の話もできるようになり、いろいろな出来事や知りあいに共通点が見つかり、時間と空間を共有していたことをようやく実感できるようになった。

だから、高校時代に山崎さんが柔道部にいたことを、まったく知らなかった。山崎さんが大学の柔道部顧問になったときは、どうして縁のない柔道の顧問になったのか、不思議に思っていた。中学時代に柔道部にいた友人との話のなかで、柔道部での山崎さんのことがでて、はじめて知った。できたばかりの創価学園の柔道部には指導者はおらず、中学生と高校生とが一緒に練習をしていた。道場で黙々と練習する山崎さんの姿に、凄みを感じながら、中学生たちも練習を続けていたというのである。練習の姿だけで、怖い先輩だと思ったと言っていた。

山崎さんと言葉を交わすようになったのは、大学に入ってからである。場所は図書館、といっても学問の話をしたのではない。ラーニング棟の地下1階にあった図書館では入館の際に形式的な荷物のチェックがあった。山崎さんはそこでアルバイトをしていた。そのころ私はゲタをはいて大学に来ていた。そこを通るたびに「ゲタを脱いで入るように」と言われて、素直に「はい」と答える。そんな会話ともいえない会話であった。そんなことが何回も続いた

が、山崎さんの口調や様子がずっと変わらなかったことをよく覚えている。

教員になると、山崎さんは文学部社会学科の「先輩」から「同僚」になった。いろいろな仕事で一緒するようになったが、山崎さんは粘り強く、じっくりと物事を進める人であった。

2007年に、文学部は5学科から人間学科として1学科になるという大きな改編がおこなわれた。その数年前から石神学部長のもとで準備作業が始まったが、山崎さんは教務部長として、実施2年目からは文学部長として、改編にたずさわられた。学問の性質や開設状況などを異にする各学科を1つにまとめ、大規模化した学科の運営には多くの困難があった。次々と現れる課題の解決には粘り強い交渉が必要であった。また、社会福祉専修という、全く経験のなかった福祉領域の専修開設でも、国家資格である社会福祉士受験が可能な体制を編み出されていた。

こうした粘り強さは、山崎さんの生来のものだと思っていた。山崎さんの研究室によくお邪魔しての、とりとめのない私の話にもよく付き合っていたからである。しかし、ほんとうは短気なほうだったように思えてきた。努力して忍耐強さ、粘り強さを身につけてきたように思えた。「一期生」としての使命感が、強い克己心となり、自らの性格を変えておられたのかと思う。

学部以外の仕事をお手伝いすることもあった。マスコミ受験者サポートの、ジャーナリズム・センターを立ち上げたときには補佐をさせていただき、現在もその仕事を引き継いでいる。さらに、他大学や地域と連携する大学コンソーシアムに参加する機会などもいただいた。力不足でご迷惑をかけてばかりであったが、視野を広げる良い機会となった。

山崎さんは話が上手だった。私などは話が平板に必要なことを伝えられなかったり、脱線してしまったりするが、山崎さんは必要なことを漏らさず、ユーモアを交えて、きちんと相手に届く話をしていた。私たちも、学生たちと一緒に話を楽しんでいた。話を大きく展開して、「なんてえことを」という言葉を挟むことが少なからずあった。私はこの言葉を楽しみに待っていた。落語好きな山崎さんは、志ん生風や先代圓生風などに言い回しを変えていた。「今日は志ん生風でしたね」なんて声をかけるとニヤリとしていた。話のうまさは天性のものと思っていた。だが、山崎さんの事前の周到な準備を知る機会があった。

当たり前のことであろうが、それを感じさせないのが山崎さんだった。

ジャズと落語、そしてタバコ、この3つは山崎さんの終生の友だと思っていた。人前ではあまり吸わないが、気づくとどこかで一服しているという嗜みかたであったが、タバコとの付き合いはずーっと続くと思っていた。だから、山崎さんがタバコをやめるということは想像すらできなかった。ところがあるとき「禁煙して1年たった」という爆弾発言を聞くことになった。その場には山崎さんと接する機会の多い人もたくさんいたが、禁煙していたなど誰も気づいていなかった。1年も吸っていないことに気づかない私たちも迂闊であったが、禁煙が1年間続いてはじめてそのことを話すのも山崎さんらしかった。

最後に仕事を一緒にしたのは、2012年1月11日、卒業論文の口頭試問であった。口頭試問は主査であるゼミの教員と副査の教員の2名で担当している。山崎さんとは毎年、何人かの口頭試問を担当していた。山崎さんの質問はかなり厳しい。論文の問題点などを、質疑応答を通して学生自らに気づかせるようにしていた。そのため、回答する学生が絶句してしまうことも珍しくなかった。ただ、その後で必ず論文の良かったところを指摘されていた。論文のなかには、良いところがみつからないものもあったが、山崎さんは必ずみつつけていた。ところが、この日は違っていた。厳しい質問がなかった。山崎さんが入院されたのは、その直後であった。

築地の病院に見舞いに行けたのは一度だけだった。担当される授業やゼミについて、いろいろ話をされたあとのことである。何ヶ月も食物を口にせず、点滴だけで栄養補給しておられた山崎さんがいわれた、「築地市場で寿司でもつまんで帰ったら」という言葉が、嗟の名ぜりふのようであった。

社会学関係の先輩の先生方の退職記念に一文を書くことは、私の仕事だと思っていた。というより後輩の特権でいろいろ書けるだろうと思っていた。だから、いつか山崎さんの思い出を書くことはあろうと予測していた。ただ、それがこんなに早く、こんな形で来ようとは思っていなかった。書くべきことは山のようにあるはずなのだが、書いてみると、まとまりのないことばかりになってしまった。あの山崎さんなら、いつもの温顔で、「しょうがないなあ、まあいいよ」といってくださると甘えながら、一文を終わりたい。